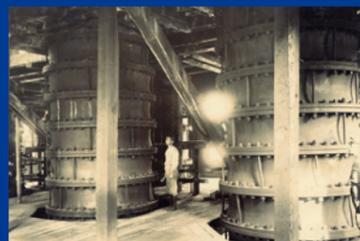


## 資源環境ビジネス ：植林事業

紙パルプ事業の歴史は、木材資源確保の歴史でもある。「木を使うものは木を植える義務がある」との考えの基に、王子グループは100年以上前から資源の育成に取り組み、「王子の森」は、60万haに達している。当初、紙パルプの原材料の安定確保のために、拡大した王子グ

ループの森林資源であったが、再生可能である森林資源をそのものを活かし、木質由来の新素材製品を社会に届ける事で、地球の未来に貢献するという方向性に変化している。

1890



### 気田工場にて木材パルプ製造開始

気田工場への原料供給を目的として、天竜川支流の気田川流域の木材資源を購入。原木の運搬は、馬を利用したり、筏を組んで川を利用して行われた。

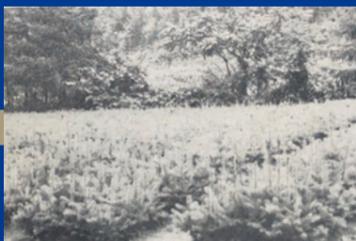
1910



### 苫小牧工場の完成と社有林の購入

苫小牧工場の完成に併せ、パルプ原料の確保を目的とした社有林の取得を開始。

1913



### 苗木養成の開始

苫小牧苗圃を開設し、トドマツ、ドイツトウヒ、カラマツ等の養成を始め、1917年より本格的に自社養成した苗木での造林を始める。

1937



### 王子造林(現:王子木材緑化)の設立

パルプ原料の造成を目的として、王子造林を設立。王子製紙の社有林経営を受託すると共に、自らの社有林の拡大・造林を行った。

1951



### 広葉樹の利用促進

春日井工場の生産開始に併せて、広葉樹チップの本格的な使用を開始した。

1956



### 林木育種研究所設立

林木の品種改良により、成長の早い木の増殖を図る事で、原材料の安定供給に寄与する事を目的に、北海道の栗山に設立。ポプラ等の品種開発を進めた。2012年に閉鎖されたが、2023年、森林資源研究センターとして東雲に再設置。

1995



### QPFL設立

ベトナムでチップ調達に続いて自社植林事業を開始。王子グループの進出もあって、ベトナムで植林ブームが到来し、現在では世界最大のチップ輸出国となった。

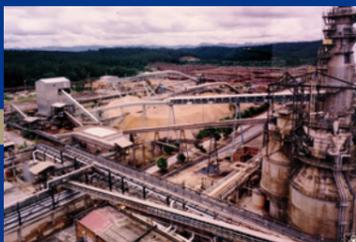
1992



### SPFL(ニュージーランド)の設立

1990年代に入り地球規模で環境問題がクローズアップされる中、資源確保のみならず環境への貢献も目的にニュージーランド南島で、ユーカリ植林事業を開始した。

1973



### CENIBRA(ブラジル)の設立

海外の広葉樹資源の利用促進を目指してブラジルに進出。リオ・ドーセ社と日本側紙パ各社合併でセニブラ社を設立。77年にユーカリ晒パルプの生産を開始した。現在は王子グループの主力工場となっている。

1970



### Pan Pac(ニュージーランド)の設立

長期的な資源対策のために海外の資源調査を行った結果、ニュージーランドにおいてパルプ工場を建設。パルプは主に苫小牧工場に供給された。現在は製材・パルプ事業含め総合林産業の拠点となっている。

1966



### チップ輸入拡大(長期輸入契約締結)

国内材の競争力低下に伴い、北米より本格的なチップ輸入を開始。長期的な原料確保を目的に10年間の長期契約を締結した。1990年には輸入比率が国産を上回った。

1964



### チップ専用船竣工

世界初のチップ専用船「呉丸」が竣工。比重の軽いチップ用に積載量を最大化するために開発された船形で荷役設備も画期的であった。

1996



### 合併による社有林の再集結

1970年から1996年までのパルプ・製紙会社との合併により、グループの国内社有林面積は、約19万ha(分収林を含む)となる。

2001



### 森林認証の取得

PanPacにて森林認証取得。王子グループの中で最初の取得となった。その後グループ各社で森林認証取得を進め、2022年度末での認証取得率は96%となっている。

2003



### 日本独自の森林認証 国内初取得

静岡県の上稲子山林において、日本独自の森林認証制度である緑の循環認証会議によるSGEC森林認証取得。国内第1号となった。2007年に国内全社有林約17.4万ha(分収林を除く)の取得が完了した。

2010



### KTH事業へ参画(インドネシア)

在インドネシアの韓国系財閥コリンドグループが保有していたKTH社に出資。王子グループとしては東南アジア最大の植林事業であり、日本向け原料供給の重要な拠点となっている。

2022



### パルプ事業強化

世界のパルプ需要の成長に対応し、豊富な自社植林資源を活用したパルプ事業の拡大に取り組んでいる。パルプ事業は、Oji Fibre Solutionsの買収、溶解パルプ事業の開始、セニブラの完全子会社化などを経て、現在は王子グループの基幹事業となっている。

2022



### 存在意義(パーパス)の策定

存在意義(パーパス)を「森林を健全に育て、その森林資源を活かした製品を創造し、社会に届けることで、希望あふれる地球の未来の実現に向け、時代を動かしていく」と定義。これからは森林の健全育成と森林資源に根づいたものづくりを行っていく。